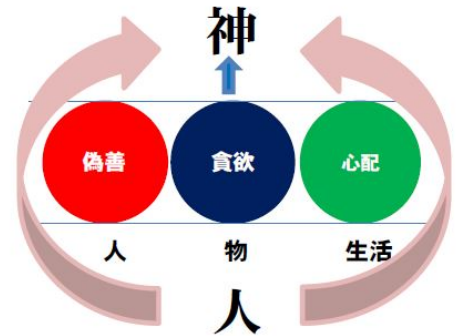


御国の民の歩み (2) 「心配する病の処方箋」

【聖書箇所】 マタイの福音書 6章 25～34節

ベレーシート

●6章 1～18節では、右の図に見るように、神と自分との間に「人」が入ってくることで**偽善**に陥ることが語られています。また6章 19～24節の箇所では、神と自分との間に「物」が入ってくることで**貪欲**に陥ることを教えています。貪欲、物欲に陥ると、それに心が捕らえられて、神が見えなくなってしまう、やがては神により頼むことをしなくなってしまう危険をイエシュアは教えようとしています。そして今回の箇所では、神と自分との間に生活が入って来ると**心配**(思い煩い)が心を支配するようになり、神とのかかわりが損なわれることを警告するとともに、その処方箋をも示してくださっています。



●今回のテキストは少々長いのですが、以下に掲載します。何度も繰り返して出てくることばがあります。それを太字で示しています。

【新改訳改訂第3版】 マタイの福音書 6章 25～34節

25 だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと**心配したりしてはいけません**。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。

26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。

27 あなたがたのうちだれが、**心配したから**といって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

28 **なぜ**着物のことで**心配する**のですか。野のゆりがどうして育つか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。

30 きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありません。信仰の薄い人たち。

31 そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って**心配するのはやめなさい**。

32 こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。

33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。 そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

34 だから、あすのための**心配**は無用です。あすのことはあすが**心配**します。労苦はその日その日に、十分あります。

1. 「心配する」という用語とその意味

(1) 用語の意味

● 「心配する」という語彙は、読んで字のごとく「心を配る」という意味です。ギリシア語の動詞は「メリムナオー」(μεριμνάω)で、新約聖書では 19 回使われています。今回のテキスト(マタイ 6:25~34)にはそのうちの 6 回が使われています。その用法は以下の通りです。

- ①25 節では命令現在形の否定「心配しつづけるのはやめなさい」、
- ②27 節は分詞「心配すること」、
- ③28 節は現在形「心配しつづける」、
- ④31 節は命令アオリストの否定「心配してはならない」、
- ⑤34 節は命令アオリストの否定「心配してはならない」と未来形「心配するようになる」
 ・ ・ ・ というように使われています。

● 新改訳は「**心配する**」と訳していますが、口語訳は「**思い煩う**」、新共同訳は「**思い悩む**」と訳しています。「気をもむ」、「不安になる」「不安に悩む」というニュアンスです。起こるかもしれないことで心が引き裂かれる」ということです。ちなみに、動詞の「メリムナオー」(μεριμνάω)に相当するヘブル語は「ダーアグ」(דאָג) 、また、名詞の「メリムナ」(μέριμνα)に相当するヘブル語は「デアーガー」(דאָגאָר)です。

● 「心配する」と言っても、「良い心配」もあれば、「良くない心配」もあります。前者の場合は、愛の配慮、魂の配慮とも言うべきもので、それを教会用語では「牧会」と呼んでいます。今回取り扱われている心配は、後者の「良くない心配」の方です。これは風邪のようにだれでも罹ってしまう病気のようなもので、神に対する信仰が弱って心が不安定になっている状態です。多くのことにおいて、将来のことなどに心を配りすぎて、そのために気をもんでしまい、心が分裂して安定を欠いてしまう病です。この病は放っておくと、御国の民として致命的な結果を招くこととなります。ですから、早めの対処が必要なのです。

● イエシュアとその一行を迎え入れたマルタとマリヤの話は有名です。その話を思い起こしてみましょう。

【新改訳改訂第3版】ルカの福音書 10 章 38~42 節

38 さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村に入られると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。

39 彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。

40 ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。

「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。

私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」

41 主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。

42 しかし、どうしても必要なことはわかずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

●ここで重要なことは、もてなしのためにいろいろと気をもんでいたマルタに語ったイエシュアのことばです。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。」とあります。原文では、「マルタ、マルタ。あなたはたくさんのことで思い煩い、混乱しています(取り乱しています)」です。マルタは「もてなし」という良い事のために心配しているように見えますが、イエシュアから見ると、度を越した心配をしており、むしろよけいな心配だと言われているのです。真のもてなしとは、マリヤのように「主の足もとにすわって、みことばに聞き入って」くれることだったのです。御国における優先順位や価値観はこの世のものとは異なるということです。御国の中に招かれた私たちにも、マリヤのようにどうしても必要なことに心を配るのではなく、マルタのように不必要なことに多く気をもんでしまうということがあるかもしれないということです。つまり、的を外した心配に陥らないようにということです。むしろ、「どうしても必要なことはわかずかです。いや、一つだけです」とイエシュアが言われたことばこそ、御国の民として心に留め置くべきことばです。

2. 人の生存や防衛を脅かす心配(思い煩い)

●今回の「心配」で問題なのは、私たちの生存と防衛を脅かすことに対する心配です。それは「食べ物のこと」、「着る物のこと」の心配です。生活の必要は衣食住と言われますが、聖書には「住」の部分が無いように見えます。しかし「住むこと」は「着ること」の中に含まれています。「住む家」「着る物」とは防衛の保障を意味します。つまり、私たち人間が生きていく上での基本的な保障—衣食住—について、イエシュアが取り上げておられるのです。心配しない人は一人もいませんが、心配は心やからだにストレスを与えます。ですから心配することだけで、病気に対する免疫力を弱めてしまうことがあるのです。

●エジプトを脱出したイスラエルの民が最初に経験したのは、まさにこの生存と防衛の保障に対する神への信仰の問題でした。彼らは荒野を通ることを余儀なくされました。脱出の前には、食べ物も住む所も与えられていましたが、脱出後は、当面の食べ物をもって出たとしてもそれはやがて尽きてしまいます。荒野ですから水もありません。この荒野において民は試されたのです。救い出した神は果たして自分たちを養ってくださるのかどうか、その信仰が試されたのです。その不安や心配に心が押しつぶされ、神のしもべであるモーセと神に対して文句(つぶやきを)言い始めました。まさに荒野での放浪は、神のことばとその力ある恵みに対する信仰が試されずして歩む(進む)ことはできないのです。神に従う者は、生存と防衛の神の保障に対する信仰を明確に持っていなければなりません。荒野は、まさに神を知り、神の恵みを経験する信仰の訓練の場なのです。神を信じる信仰が成長するためには、荒野経験は選択科目ではなく、必

修科目です。

●サタンが問いかけてきます。「神があなたに対して生存と防衛の保障を与えてくださると、本当に信じているのですか。」と。ここであなたが「はい」と言えなければ、サタンはこう言い続けるでしょう。「そうでしょう。心配ですよ。これまでは良くて、これからは何があるかわかりませんからね。でも、こうすれば、安心ですよ。」……。サタンのささやきのことばを信じて、それに従ってしまうなら、あなたは神によって生きるということができなくなってしまいます。私たちが心配する原因は神への信仰が希薄だからです。ですから、「信仰の薄い者よ」と言われるのです。いわば、これが罪人である私たちの姿なのです。果たしてだれが私を生かすのか。だれがこの私を支えて守って下さるのか。この問いに対して私たちは冷静になって考える必要があります。そして、神への信仰によって堅く立たなければならぬのです。

3. 心配に対する処方箋

●神と心配は共存できません。とはいえ、「心配してはなりません」といくら言われても心配してしまう弱さが私たちにあります。そんな私たちに対してイエシュアは、私たちが神の支配によって生きることができるよう、すなわち、御国の民として生きることができるよう、心配することに対するいくつかの処方箋を示してくださっています。今回はそこに目を留めたいと思います。これから目を留めることは、病院の医師の処方箋ではなく、神の御子イエシュアの処方箋です。

(1) 生存と防衛の保障をしつてくださる天の父がいることをよく考えよ

●マタイ 6 章 27 節には「空の鳥を見なさい」とあります。さらに 28 節では「野のゆりがどうして育つか、よくわきまえなさい」とあります。いずれも自然界を支配しておられる天の父のことを考えよとイエシュアは促しています。自然から学べということです。

26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの

天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。

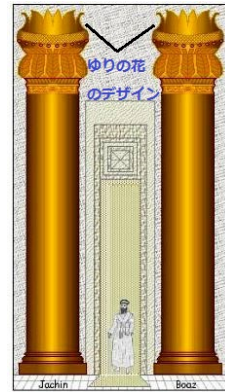
27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。

28 なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。

●上記の箇所には二つの動詞の命令形があります。赤字で示している箇所がそうです。26 節の「見なさい」と訳された原語はギリシア語の「エンブレポー」(ἐμβλέπω)のアオリストの命令形で、自ら、自発的に、主体的に「よく見て考えること、熟考すること」を意味しています。28 節の「よくわきまえなさい」と訳された原語は「カタマンサノー」(καταμανθάνω)もアオリストの命令形です。これも、自ら、自発的に「徹底的に、じっくりと観察する」ことを命じています。

●最初の「見なさい」の命令で、何を見るかと言えば、「空の鳥たち」のことです。彼らはどのようにして生きているのでしょうか。種を蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしないのに。空の鳥たちが生きているのは、天の父が養っているからです。とすれば、あなたがたは「空の鳥たち」よりもずっと優れた存在なのですから、天の父が養ってくださるのは当然だとイエシュアは言っています。

●後の「よくわきまえなさい」(28節)の命令も、先と同じく、自然を通して自ら学びなさいと語っています。自然界における生き物も草木もすべては神が造られたものです。ここでは「野のゆり」がどうして育つのかを良く観察せよと命じられています。ここでの「野のゆり」の「野」は「アグロス」(ἀγρός)で、人が食べ物を作る為に耕された土地を意味します。その畑に自然に生え出た「ゆり」(「クリノン」κρίνον)は、人の手によらない、いわば神によって育てられた草花です。栄華を極めたソロモン神殿には、ゆりの花の形をした柱頭(1列王記7:19, 22)やゆりの花の形の装飾を施した「海」と呼ばれる大きな洗盤がありました(同、7:26)。しかしソロモン自身はゆりの一輪ほどにも着飾ってはいなかったのです。なぜなら、ソロモンは自らを飾るよりも、神殿を飾ることによって、神に栄光を帰すことを求めたからでした。



●「野のゆり」の「ゆり」はギリシア語では「クリノン」(κρίνον)ですが、ヘブル語では「シューシャン」(שׁוּשַׁן)の複数形です。新共同訳は「(野の)花」と訳していますが、それではこの本当の意味が伝わりません。「ゆり」でなければならぬのです。というのは、イエシュアは弟子たちと野に咲く「ゆり」の花を掛けて語っておられるからです。聖書における「ゆりの花」は神に選ばれた者たちの象徴なのです。単数形であっても、また複数形であっても、いずれも「神に選ばれた者の象徴」なのです。



●「きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草(※)さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。」(30~32節)とあります(※「草」は「コルトス」χόρτοςで「牧草」を意味します)。

●ここでの「異邦人」とは、神を信じない人々のことです。彼らが切に求めている関心とは「生存と防衛の保障のこと」です。「切に求める」という意味は、それが最大級の求めであることを表しています。「食べること」「着ること(住むこと)」をいつも心配しているのです。しかし御国の父はそれらが必要であることをだれよりも知っておられて、それを御国の民に保障して下さっているのです。もし、御国の民である私たちがそれでも心配になるとすれば、それはサタンが私たちの心を「心配する」ように誘惑しているからです。その声に従ってはなりません。

●なにゆえに人はあくせくと働くのか。それは生きるに必要なものを得るためです。こんな話があります。ある親が子どもに「勉強しなさい」と言いました。子どもは親に質問します。「なぜ、勉強しなければならぬの」。すると親は「それはよりよい学校に行くためさ」と答えます。(子)「よりよい学校に行くとどうなるの」、(親)「それは良い学校に行くと、良い会社に就職できるからさ」、(子)「良い会社に就職するとどうなるの」、(親)「それは良い暮らしができて、楽をするためさ」、(子)「? 楽なら、もうしているよ。」

●聖書は怠けることを推奨してはいません。勤勉であることは、やがて神のために有用な働きをするようになるための準備です。今自分に与えられていることを精一杯することを教えています。

(2) 神の国とその義を、まず第一に求め続けること

●イエシュアが私たちに教えて下さっている「心配する」ことに対する処方箋の第二は、33節にあります。「心配するのはやめなさい」という表現は消極的ですが、第二は積極的な表現です。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 6章 33節

だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

●ここには、命令と約束があります。「神の国とその義」とは、御国とその御国との正しいかかわりのことです。それを「第一」、つまり「何にもまして優先して」、「求める」(「ゼーテオー」ζητέω の命令現在形で「熱心に、探し求め続けること」)なら、これらのもの(=私たちが生きていくために必要なもの)が必ず与えられる(未来形)という約束をしてくださっています。ここで「与えられる」と訳された原語は、「あなたに向かって置かれる」という意味です。つまり、神の国とその義とを第一にするなら、必要なすべてのものをその人に向かって神が置いてくださるのです。神が面倒を見てくださるのです。何というすばらしい配慮でしょうか。とすれば、心配は無用なはずですが。

●もし私たちが自分の必要のことを第一にするなら、神の国とその義(かかわり)を第一にしていくことはできません。神が最も関心をもっておられることに専心して参与することができなくなるのです。とすれば、神の国とその義を第一にしていこうとする決意と献身が不可欠です。神の国とその義とを第一にする者に、神はすべての必要を与えて下さることを信じましょう。その信仰が「心配する」という心の病気を癒していく処方箋なのです。

(3) 今日生き抜くということ

●34節を読みましょう。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 6章 34節

だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。

労苦はその日その日に、十分あります。

●第三の処方箋は、「今日を生き抜く」ということです。「今日」という一日を、神を信頼して歩めば良いということです。ここでの心配は「あす」とは「これからのこと、つまり将来のこと」を意味します。この点において私たちの多くが失敗するのです。これから起こるかもしれない問題を想像して否定的に捉えてしまうからです。

●明日のことは実はだれにもわからないのです。明日を造るのは、神ご自身です。明日のことは神にしかわからないのです。とすれば、「あすのことはあすが心配します」とは神が明日のことを心配してくださるという意味です。したがって、明日のことは私たちが関与すべきことではなく、それは神にお任せして、私たちは「今日」という日だけに関与すべきなのです。

●「労苦」と訳された「カキア」(κακία)は、「悪」とか「災い」とも訳すことができます。つまり、今日という日に起こり得る「悪」「災い」「労苦」(単数)はその日その日に、十分あるのです。それに対処すれば良いということです。

●今日を生き抜く力は、将来なされる神の善を信じて神を待ち望み続けることです。なぜ「待ち望み続けなければならないのか」と言えば、心配はいつでも繰り返し襲ってくるからです。神を信頼して待ち望みながら、その日その日にやらなければならないこと、その日に対処すべきことに力を集中する訓練を積み重ねていきましょう。そのために、神に祈り、知恵をいただいて、今日という日に対処することに専心すべきです。私たちの神である天の父はどこまでも良いお方です。得体の知れない明日ではなく、神がご支配なさる良い明日を信じて、今日という一日を楽しみながら生き抜く知恵を身につけて行きましょう。

最後に

御国に生きるように招いてくださった方の生き方の処方箋をもう一度、思い起こしましょう。それは以下の三つです。

1. 空の鳥たちを「見ること」。野のゆりがどうして育つのかを「よくわきまえる」こと。自然から学べ。
2. 神の国とその義とを第一に求め続けること。御国の民に必要なのはごくわずか。いや「一つ」だけ。
3. 明日を造られる神に信頼して、今日一日を生き抜くこと。

2017.11.05